

学術調査報告書

2008年5月9日提出

(フリガナ)	アダチ キョウスケ	入学年度	2000年度
申請者名	足立 享祐	学年	D3

研究題目	植民地支配のイデオロギーと在地語コミュニケーション
主任指導教員	藤井 毅

(1) 学術調査の目的

本研究課題は、東インド会社ボンベイ管区において、植民地官僚と在地エリートたちとの接触により作り出された領域を言語空間と言う観点から考察するものである。その主眼は、植民地化に伴う知的体系の交換と社会記述の中で、マラーティー語などの在地諸語が果たした役割を歴史学的に詳らかにすることにある。

今回の研究助成では、国際学会報告として第12回国際マハーラーシュトラ会議で研究発表を行うと共に、学術調査としてマハーラーシュトラ州ムンバイを中心とするマラーティー語揺籃本についての資料調査を実施する。国際学会では“List of Words and Order of the World; A study on the making of Molesworth's Marathi-English Dictionary”と題する研究報告を行う。発表ではモールズワースのマラーティー語・英語辞書初版(1831)の編纂から出版に至る経緯について、東インド会社取締役会資料を主たる依拠資料として概略する。近代的辞書の存在が現地の言葉を包摂していく媒体となる歴史的過程において、多言語状況下での言語間の関係、地域差・階層差、あるいは口語と文語といった問題が、編纂の過程を通じて如何なる形で議論され、当時の社会記述に如何なる影響を与えたのかという問題に焦点を当てる。

国際学会後は研究課題に関連して資料調査を実施する。インドの文脈に於いては、幾つかの歴史的過程を経て公布された出版書籍登録法(1867年25号法)をもって印刷施設・図書・定期刊行物の管理体制がほぼ確立されるのだが、マラーティー語圏では東インド会社など、ヨーロッパからの活版及びリトグラフ印刷技術の導入からこの法令に先立って出版された書籍を、いわゆるインキュナブラ＝揺籃本として調査収集、修復保存及び研究の対象とするのが通例である。今回の調査ではムンバイ大学などの機関を調査し、これらの

マラーティー語揺籃本、分けても文法書や辞書、教科書類について可能な限り閲覧・収集するよう努めることとする。

(2) 調査実施地および期間

【国際学会報告】 2007年12月16日に渡印し、12月18日から20日にかけて学会に参加した。学会の概要については下記の通りである。

学会名：The 12th International Conference of Maharashtra - Culture & Society

開催日：2007年12月18日～12月20日（報告日：2007年12月19日11:10-11:50）

学会開催地：インド・マハーラーシュトラ州プネー（ホテル・スワループ）

学会運営委員：モーハン・アガシェー（Dr. Mohan Agashe）、ラージェーンドラ・ヴォーラー（Professor Rajendra Vora, University of Pune）、アン・フェルドハウス（Professor Anne Feldhaus, Arizona State University）

【学術調査】 2007年12月23日から2008年1月13日にかけてムンバイー大学フォート図書館（インド・マハーラーシュトラ州ムンバイー）において揺籃本調査、並びにマハーラーシュトラ州立公文書館（同）において公文書調査を実施した。帰国途上、2008年1月13日から1月15日にかけてデリー近郊（ハリヤーナー州グルガーオン）の書店において資料収集を行った。

(3) 学術調査の具体的な実施内容

【国際学会報告】 国際学会 International Conference of Maharashtra - Culture & Society はマハーラーシュトラの文化・社会に関して二年に一度行われる国際学会であり、今回は第12回目に当たる。会議は2007年12月18日から20日の3日間の日程で、20の研究報告が行われた。本学会では共通テーマの設定が通例となっているが、今回のテーマは“Mind/Heart (*man*) in Maharashtra” と定められた。*man* に充てられた Mind/Heart の訳語が示すように、大会ではマハーラーシュトラの社会と文化における理性、願望、空想、感情、態度、信仰、世論といった多くの論点が論じられた。なお学会全体の内容については別途国内研究誌に投稿の予定であるため、ここでは本助成金受給者の研究報告の概要を

述べておきたい。

研究報告では、在地諸語が当時の植民地社会・共同体の精神性を表現しうる言語として認知される過程を辞書編纂事業の面から光を当てた。事例として取り上げたのは、ジェームズ・モールズワース (James Thomas Molesworth : 1795-1875) による『マラーティー語・英語辞書 *A Dictionary Murat, hee & English Dictionary compiled for the Government of Bombay*』初版(1831)の編纂過程である。特に強調したのは、モールズワース辞書に表れるマラーティー語観へのヴァンズ・ケネディを中心とする評価委員会の批判と、植民地官僚・宣教師からなる支持者たちの見解それぞれの論理である。

この時期の辞書編纂は、語義や概念に従い分類配列されるサンスクリット語辞典の伝統と、アルファベット順にあらゆる語彙を配列し語源と語義を定義していく近代的形態とのまさに端境期に置かれている。ケネディは当時、優れた東洋学者として知られ、1824年には伝統的なサンスクリット語辞書である『アマラコーシャ *Amarakośa*』からバラモンの助けを得て選別した語を元に、8,000語の収録語数を持つマラーティー語辞書を編纂している。しかしながらケネディによればマラーティー語は未だ開発の途上にすぎなかった。「それは全く肉体的なものであり…精神の操作を表現する術語に不足している。思考する、省察する、空想するといった概念はマラーティー語に於いて対応する言葉を持たない」と考えていた彼にとってモールズワースの辞書編纂は、その語彙を言語学の原則に従わずに不当にその語彙を水増ししているものとして批判の対象となったのである。

このような批判を受けつつも、モールズワースは多くの支持者を得た。モールズワースは、マラーティー語へのサンスクリット語やペルシャ語といった古典諸語やその他の近代諸語からの影響を認め、また様々な口語表現や語彙の比喩的意味を含めていくことで、収録語数を40,000語へと飛躍的に増加させた。ここにおいてモールズワースの辞書編纂はマラーティー語により描かれる世界観を大幅に拡大することに貢献することとなった。モールズワース辞書の収録語数は1857年の第二版において60,000語にまで増え、今日においてもこの辞書は標準的なマラーティー語・英語辞書の一つとして利用されるに至っている。

申請者の報告後、参加者からはモールズワース辞書の精度について、またタンジャーヴァルでのマラーティー語辞書写本などについてのコメントを得た。収録語彙とその意味が歴史的にどのように変化し、またどの程度まで空間的な広がりを持っているのかについては、

様々な文献をコーパス化し、計量的に分析していくことが必要であろう。これについては現在の研究テーマの関心の外にある問題であるが、今後、言語学者や文献学者などと協力しうる分野として課題としておきたい。

【資料調査：ムンバイー大学フォート図書館】 今回の学術調査では、時間の制約上、多くの時間をムンバイー大学での資料調査に注力した。1857年の大学法に基づき、イギリス植民地政府によりインドの三管区（ベンガル、マドラス、ボンベイ）に大学＝ユニバーシティが設立されて以降、ボンベイ大学（現ムンバイー大学）はカルカッタ、マドラスと並んで19世紀の英領植民地経営上、別格の役割を与えられた大学である。大学図書館の蔵書は1864年東インド会社図書館の移転に伴い寄贈されたものと、ウィルソン（John Wilson）の寄贈本を中心に構築され、その後様々な形で収集が行われてきた。特に近代以降のマラーティー語印刷媒体の形成を考察する上で重要なのは、プリヨールカル（Anant Kakba Priyolkar）により大学に寄贈された蔵書コレクションである。ムンバイー・マラーティー文庫の代表としても活動した彼の蔵書コレクションは、大学図書館全体の19世紀出版物蔵書の一定部分をカバーしていると共に、それ自体興味深い一体を形成している。

今回の調査では、上記のコレクションを中心に、日本国内に所蔵されていない揺籃本、マラーティー文学史、印刷史関係の資料収集を実施した。特に植民地官僚や在地の知識人によって発行された19世紀初頭のマラーティー語教科書類について可能な限り系統的に約120点の閲覧と複写を行い、一定の成果があった。成果の一部については、後述の「(4)学術調査の結果およびそれに基づく考察」で、初期のマラーティー語数学書について報告することとしたい。

【資料調査：マハーラーシュトラ州立公文書館】 東インド会社ボンベイ管区の公文書については、マハーラーシュトラ州立公文書館、インド国立公文書館、英国図書館（旧インド省記録）のそれぞれの調査が必要であるが、本調査においてはマハーラーシュトラ州立公文書館において1820年代から1830年代の初期のマラーティー語教科書の作成についての主管庁である総務省の行政文書を、あらかじめ準備したリストに従って約700頁分収集した。担当官の変更もあり、利用許可並びに複写許可を得るまでに10日近く必要であるため、新たな資料調査は実施しなかった。複写作業についても本来数週間必要な状況であったが、事情を伝え担当官に配慮していただいた。収集資料の詳細については上記と同じく「(4)学

術調査の結果およびそれに基づく考察」を参照されたい。

(4) 学術調査の結果およびそれに基づく考察など

【学術調査報告】 アングリシストとオリエンタリストの論争の帰趨を決したマコーレーの覚書に代表されるように、植民地化が進められた 19 世紀の南アジアに於ける教授言語を巡る諸問題は、いわゆる文化帝国主義の議論において重要な位置を占めている。本稿ではボンベイ教育委員会で行われた「在地語教育論争」において、在地語学校を支持する論陣を張ったジョージ・リツォ・ジャーヴィス(George Ritso Jervis)を取り上げる。ここでは今回の学術調査で収集した、マラーティー語による教科書とそれにまつわる公文書群の考察を通じて、上記の論争へと至る彼の立ち位置を分析する手掛かりとしたい。

マラーティー語教科書の揺籃と西洋科学の翻訳

—ジョージ・ジャーヴィス(1794-1851)の活動を中心に—

はじめに—ジョージ・リツォ・ジャーヴィスの略歴—

ジョージ・リツォ・ジャーヴィスは 1794 年 10 月 8 日、元セイロン准知事ジョン・ジャーヴィスの長男としてマドラスに生まれた。彼は四兄弟の弟であるトーマス・ベスト(Thomas Best Jervis)と共にインド測量史・土木工学史に足跡を残している。ジャーヴィスはマーロー軍学校、ウリッジ王立軍学校を経て、アディスコム東インド会社カレッジを卒業し来印する。工兵科として 1814 年から 1816 年にかけてグジャラートの調査、また 1819 年にバローダーにおいて道路、橋梁など土木工学に従事している。その後、デカン地域の主任技師へと昇進し、道路、橋梁、貯水池、水力事業、灌漑、排水、河川、船渠、港湾、機械といった管区内の公共事業の企画と監督を担当した人物である¹。

東インド会社政府にとって、限られた職員数の中で管区内の都市開発を具体的に実行するためには、建築や測量といった能力を持つ現地住民の補佐は必要不可欠のものであった。ジャーヴィスはボンベイ教科書・学校協会、ネイティブ教育協会、工学所並びにボンベイ教育委員会での活動を通じて、当時ヨーロッパで出版されていた学術・啓蒙書籍のマラーティー語への翻訳を積極的に行い、現地住民の育成に取り組むこととなる。その作品には

当時イギリス本国において利用されていたハットン(Charles Hutton : 1737-1823)、ド・モルガン(Augustus de Morgan:1806-1871)の手による数学書や、ロンドンで活動していた有益知識普及協会(Society for the Diffusion of Useful Knowledge)による出版物の翻訳が含まれている。これらの作品群は、ボンベイ管区内での数学をはじめとするヨーロッパ諸学の導入という科学史上の問題と共に、揺籃期の在地語教科書の出版と普及の問題を考える上で中心的な事例の一つとなるものである。本稿では特に後者の問題、特に教科書における在地語翻訳論に焦点を当て論ずることとする。

ネイティブ教科書・学校協会と工学所の設立

ボンベイ管区において現地住民への教育が確立・制度化されていくまさに萌芽となったのはネイティブ教科書・学校協会(Native School Book and School Society)である。それまでヨーロッパ人向けの慈善学校の運営を行っていたボンベイ教育協会(Bombay Education Society)が組織されていたが、現地住民への教育が意識されるのは、1820年の教育協会総会で新設された現地住民の知的・道徳的改善とヨーロッパの文学科学の知識のための委員会が第一歩である。この委員会は1822年8月21日に個別の協会として分割・再編されることでネイティブ教科書・学校協会として独立し、その動きはより具体的なものとなった。同様の協会はベンガルなど他の管区でも組織されているが、各管区間での言語の相違は新たな翻訳を求めるものとして協会はボンベイ管区政府の支援と共に活動を始めることとなるⁱⁱ。

ネイティブ教科書・学校協会により先ず行われたのは、現地住民の教育に関する特別委員会を設置し、現状を調査することであった。1824年8月に発行された協会の第一回年次報告では特別委員会の調査に基づく現地住民への教育における問題点として、1.教科書、2.容易かつ効率的な指導法、3.教員、4.資金という四つの問題点が指摘されている。その中でも、第一の、そして主たる問題は「教育及び精神的改善のための書籍が嘆かわしいほど不足している」ことにあると考えられた。この問題に対応するため企図されたのは、ヨーロッパの初級・上級の書籍を「会話や実務にのみ利用されており、文学の開発や拡大に向けられていない」マラーティー語とグジャラーティー語へ翻訳し、現地での教育に利用するという案だった。これを実行するため、特に在地語に精通したヨーロッパ人には「これらの言語を定められた規則や原理に纏めるよう知的な現地住民を支援し、それらを用いて理事会の認可を受けるような作品を英語から翻訳する」ことが求められたⁱⁱⁱ。

ジャーヴィスは教科書・学校協会のヨーロッパ人幹事として、現地人幹事であったサダーシヴ・カーシーナート・チャトラー (Sadāśiva Kāśīnatha Chatre) らと共にこの計画を強力に推進した。計画では特に教育に必要な初歩的書籍として、協会が提示する 1. 二つの言語の様々な文字の習得、2. 有益な単語の綴りと正書法、3. 複合語、4. マラーティー語及びグジャラーティー語文法、5. 3,000 から 4,000 語の語彙集、6. 読本の改善のための教科書、7. 算数の体系、8. 地理、9. 太陽系に関する簡潔な説明、10. 自然哲学・自然史、11. 歴史学、年代学、12. 倫理学に関する分野と共に、政府から 1824 年 3 月 10 日の協会への政府の通信で示された 13. 初等代数学、14. 格律、15. 学校運営といった分野が挙げられた^{iv}。協会への補助金総額が定められるまで、教科書に対してはその作成に応じて潤沢に費用が支払われ、第三回年次報告では早くも 8 点のマラーティー語教科書、総計 10,000 部の出版が報告されるに至っている^v。

ジャーヴィスの活動の具体的な実践の場の一つとなったのが工学所 (Engineering Institution) である。公共事業に必要な知識を教授するため 1823 年に開設された工学所において、ジャーヴィスは学監として工学所の運営の中心的な役割を占めている。1824 年の時点で工学所には 36 名のインド系学生と 14 名のヨーロッパ系の学生が、1826 年には 86 名の学生が在籍していたという。ボンベイ管区に於いて現地住民への教育が未だ黎明期にある中、工学所は実質的に官学所 (Government Institution) と呼ばれ、その監督者は公学監 (Superintendent of Public Instruction) とまで称されるようになった。1826 年 5 月 17 日の主任技師グッドフェロー (Colonel S. Good fellow) の報告では、第一学級においてはハットンの数学書を通じて代数学と幾何学を修得しており、他の学級においても在り地諸語における術語の不足を指摘しつつも、少なからず好意的な評価がなされている。これらの成功については、特に学監であるジャーヴィスによるヨーロッパの標準的な算数・幾何学教科書の在り地諸語への翻訳が大きく寄与しているとされた。但し、このような活動が科学上の進歩という文脈のみならず、植民地政府の政治的意図と分かちがたく結びつけられたことはいうまでもない。報告書では工学所で学ぶことが出来る知識が「純粋で合理的な宗教概念の影響を与え」、「宇宙の構造を考えることで偏見や迷信から解放」する学問である天文学の準備となると共に、「知識の広がり按比例して、良き人間、良き臣民となり、野心や狂信の具と化すことはなくなる」とされ、「財政や政策の問題としてみられようと、教育の一部門として学院から生じる利点は大きい」と期待されたのであった^{vi}。

伝統的学問分野における数学

先に述べたように、ジャーヴィスの教科書は自然科学、殊に数学分野に重点が置かれたのだが、インドの伝統的な「数学」分野は、いわゆるヴェーダの補助学（ヴェーダーンガ）の一つである暦法学(ジョーティシャ jyotiṣa)から天文学の一分野、特に数理天文学として大きく発展していた。特に良く知られるのが 12 世紀のバースカラ二世による『シッダーンタシローマニ』である。リーラーヴァティー、ビージャガニタ、グラハガニタアディヤーヤ、ゴーラアディヤーヤの四部からなる本書は、前二者がいわゆる数学書であり、それぞれ、類型化された問題に対する算法・解の手続きを表現したパーティーガニタ（書板数学）と未知数を表す文字の助けによる理と証明を伴う展開あるいは方程式論としてのビージャガニタ（種子数学）となっている^{vii}。

このような伝統的な枠組みは、1818 年のペーシュワー領の併呑後、1821 年に伝統学問の保護・促進を目的として設立されたプーナ・サンスクリット・カレッジにおいても維持されており、教授される 7 つのシャーストラの一つとしてジョーティシャが設置され、数学・天文学に当たる分野と定められた^{viii}。また 19 世紀、東インド会社政府やそのインド学者たちは写本・手稿を積極的に収集し、在来の伝統諸学の研究を推し進めており、例えば、ポーパールの政務官となったラーンスロット・ウィルキンソン (Lancelot Wilkinson) はベンガル・アジア協会の雑誌に掲載された論攷でインド在来の天文学を 1.ジャイナ教によるもの(Jain or Bauddha), 2.プラーナ文献によるもの(Brahmanical or Puranic system) 3, ジョーティシシュ若しくはシッダーンタ(Jyotish or Siddhantas)と分類した上で、英語や翻訳が入手困難な内地において 3 の代表的な文献である『シッダーンタシローマニ』を利用して教育することを構想している^{ix}。

一方で、西洋より移入された諸科学の受容を推進しようとする人々と在来の学問伝統を保持する人々との間には、しばしば学術的な緊張関係が生じている。ジョーティシシュに関する論争として、ウィルキンソンのパンディットでバラール出身のバラモン、スッバージー・ラームチャンドラ・シャーストリー(Subbāji Rāmacandra Śāstrī)が説いたシッダーンタの宇宙観のコペルニクスの宇宙観への接合と、それに対するデーシャスタ・バラモンでプーナ・サンスクリット・カレッジのヤジュネーシュヴァラ・サダーシヴァ・ローデー(Yajñeśvara Sadāśiva Roḍe)によるコペルニクス・モデルの無効性を説いた反論が知られている^x。

自然科学の翻訳と術語について

ヨーロッパとインドという異なる言語と認識の体系が存在する中で、西洋式教育の導入、特に翻訳という作業を行うに際しては、サンスクリット語やペルシャ・アラビア語といった学問伝統と豊富な文学遺産を持つ言語との関係は無視できないものであった。前述のアジア協会論文でウィルキンソンは、ジャーヴィスの在地語教科書が正接関数 (tangent) の訳語として“Spārsha Rekhá”を充てていることについて「バラモン全体でなくとも科学的ヒンドゥーによれば理解可能な述語、数学専門用語を省略し、彼らにとって全く知らない自らの造語で代替」するものとして批判の対象としている^{xii}。

それではジャーヴィスによる翻訳とその戦略とは如何なるものであったのか、具体的に検証しておきたい。ジャーヴィスの手によるマラーティー語の作品についてピンゲーによれば、少なくとも下記のもが確認されている^{xiii}。(なお今回の調査でムンバイー大学フォート図書館で確認できたものについてはMULの略号と共に所蔵番号を末尾に附した。)

(1) ग्रंथाचीं भाषांतर किंवा नवीन ग्रंथ करणारास ब सा वषयींच प्रसिद्धप Gramthācīṃ bhāṣāṃtareṃ kiṃvā navīna graṃtha karaṇārāsa bakṣisāviṣayīṃcem prasiddhipatra, Mumbaī, 1825. p.25,20,20.

(2) ग णतकृ त अथवा ग णतमाग Gaṇitakṛti athavā gaṇitamārga Mumbaī, 1826. p.125.

(3) ग णत दुसरा भाग अपूणाक Gaṇita dusarā bhāga apūrṇāṃk [別タイトル G णतमागA Maratha Treatise on Arithmetic, 2nd part.], Mumbaī, 1826. p.247 [MUL: M511 Hut 244767 pc].

(4) कत यभू मती Kartavyabhūmitī, Mumbaī, śake 1748 [1826/7CE ?] . p.173.

(5) शिक्षामाला Śikṣamālā [別タイトル A Course of Mathematics in the Marat,tha Language], Mumbaī, 1827.

(6) शिक्षामाला Śikṣamālā [別タイトル A Course of Mathematics in the Marat,tha Language, vol.1 consisting of Arithmetic and Book-keeping], Mumbaī, 1828. p. 470. [MUL: M511 Hut/Bon 244771 Pc]

(7) विध्येचे उ`शा लाभ आ ण संतोष Vidhyece uddeśā lābha āṇi saṃtoṣa [別タイトル Preliminary Treatise on the Objects, Advantages and Pleasures of Science], Mumbaī, 1829, 169. [MUL: L:14139.b.2]

(6) बीजग णत Bījagaṇita Puṇe, 1843 (śake 1764). P.248.

(7) बीजग णत मूलपी ठका bījagaṇita mūlapīṭhikā Puṇe, 1848. p. 386.

(8) आ दकरण भू म त ādikaraṇa bhūmiti, Mumbaī, 1849. p.196.

(9) डमागन याचा अंकगणताचा मूळपी ठका Ḍamārgana yācā aṅkagaṇitācā mūlapīṭhikā
[別タイトル De Morgan's Elements of Arithmetic], Mumbaī 1850. p.280 [MUL:
M511 Dem 245838 pc]

ジャーヴィス自身の翻訳の原則については上記(1)の『書籍の翻訳あるいは新編への助成に関する書 ग्रंथाची भाषांतर किंवा नवीन ग्रंथ करणारास ब सा वर्ष्यांच प्रसिद्धिपत्र』に最も良く明示されている。

「・・・地方語で全ての人々が理解するよう書籍は考慮される。成熟した言語の語彙を注ぎ込むことで難解にするべきではない。その言語においてあるべき語彙が得られないならば、原語から取るべきである。マラーティー語とグジャラーティー語にはサンスクリット語から、そしてヒンドウスターニー語には元となるペルシャ語から語彙を考慮するべきである。もし地方語若しくはその原語において既知の語義あるいは通用する語彙が付されないのであれば、その際には英語の語彙を取ることを問題としない。」^{xiv}

この原則にはジャーヴィスによる当時のボンベイ管区内の在地諸語に対する認識が反映されているといえよう。チャールズ・ハットンとボニーキャッスルからの翻訳である(3)の『算術 गणतमाग』の扉頁において以下のように宣言されている。

「この算術はマハーラーシュトラ語で執筆する。そこでは幾つかの名称がこの言語で明らかとなっていない。それらについてはサンスクリット語により記述している。またこの地域の慣行では多くの言語の語彙が理解されるが、ここでは大部分をマハーラーシュトラ語彙で記述する」^{xv}

ジャーヴィスの翻訳においては、サンスクリットで記述された伝統学問の用語の利用が排除されたり、通用する語彙が見いだされない限りにおいて外来語としての英語の利用が制限されることはなかった。例えば(2)においてはクルカルニーは数列 śreṇī や一次方程式 ekavarṇa-samīkaraṇa といった伝統的な数学用語がジャーヴィスによって利用されていることを挙げている^{xvi}。また(5)の『シクシャーマラー शिक्षामाला』^{xvii}では各章を構成している、代数学 bījagaṇita (前述の通り、字義通りには種子数学)、対数 lāgratameṃ (英語の Logarithms より借語)、幾何学基礎 bhūmiticeṃ ādikāraṇa、代数学の幾何学への応用 bījagaṇitāce bhūmitīśiṃ saṅgatīkaraṇa、三角法 sarala regha trikoṇamiti (三角形を示す語としての trikoṇa は西方伝来の占星術の述語であり、伝統的には三辺形 tribhuja とさ

れる^{xviii})に見られるように、柔軟に様々な言語から述語が選択されているといえよう^{xix}。

このような在地社会の言語状況の中でジャーヴィスが採ったのは、ヨーロッパ諸学を在地の言語でいかに翻訳し普及させるかという啓蒙主義的な立場である。この点は(7)の『科学の効用と利点そして歓喜 विद्येचे उ`शा लाभ आ ण संतोष』にみる事が出来る。原書はホイッグ党のヘンリー・ブルム (Henry Brougham)を中心として 1826 年にロンドンに設立された有益知識普及協会による“A Discourse of the objects, advantages, and pleasures of science”の翻訳であり、ジャーヴィスが本国の思潮に影響を受けつつ活動していたことを指し示すものものといえるだろう^{xx}。本書のマラーティー語版は、原著の出版からほぼ間を置かず 1829 年 2 月に出版されている。訳出はジャガンナート・シャーストリー・クラムヴァント (Jagannātha Śāstrī Kramavaṃta) の助けを得て行われた。献辞はサーターラーのラージャーによる現地住民教育への支援に対し捧げられている(1829 年 7 月 21 日付)。幾つかの部分で省略が行われていることが明記されている(p.169)ものの、構成としては原書を踏襲しており、各章はそれぞれ、序説 *prāraṃbha* (pp.1-7)、1. 数理科学 *śikṣāmālāvidyā* (pp. 7-24)、2. 数学と物理学の真理における違い *śikṣāmālāvidyā āṇi jaḍavidyā yāṃce satyanāṃtīla bheda*, (pp. 24-38)、3. 自然科学あるいは経験科学 *sr̥ṣṭividyā athavā jaḍānubhaviñāna*, (pp.38-73)、4. 動物と植物への自然科学の応用 *tiryāṃca āṇi udbhidajaḍayājavara sr̥ṣṭividyecī yojanā* (pp.73-120)、5. 科学の利点と歓喜 *vidyēce lābha āṇi saṃtoṣa* (pp.120-159)と翻訳されている^{xxi}。またマラーティー語版では 152 頁から 168 頁まで用語集が附されており、111 語の見出し語を通じて本書の理解を促進するよう企図されている。この点もジャーヴィスがマラーティー語による述語の普及を意識していた証左として挙げる事が出来るだろう。

オークランドの覚書から在地語教育論争へ

1830 年になるとジャーヴィスは教育協会の幹事職を後任のロバート・コットン・マネー (Robert Cotton Money)に譲り^{xxii}、査閲技師 (Inspecting Engineer)として技師としての本来の業務に専念するよう求められる。1829 年から 1832 年にかけて工学所とその石版印刷施設も廃止されるに至った。1832 年の行政議事録には印刷施設の廃止と転用に関する議論が記され、エルフィンストーン (Mountstuart Elphinstone)の個人文書にはジャーヴィスからの施設維持を願う書簡が残されている^{xxiii}。ボーマン=ベヘラームはその原因として、工学所が当初目的以上に拡大し、政府による卒業生の雇用の問題や、文官・武官を問わず入学を許

可している問題、また政府による監督が及ばない範囲での活動、など幾つかの点を挙げている^{xxiv}。折しも 1832 年にはペーシュワ一期の首府であり伝統的学問の中心地であったはずのプーナにも官立英語学校が設立されるなど、1830 年代に入ると徐々にではあるが、時代環境が次第に変化しつつあったともいえよう。

しかしながらジャーヴィスらが作成した初期の在地語教科書は、インド政庁におけるオークランド覚書(1839年11月24日)を境に再び着目されることとなる。マコーレーの覚書とベンティンクの決議を経て出されたこの覚書では、翻訳の実践における困難と共に「東洋語に精通した者によりヨーロッパ文学の高貴な精神を翻訳する」必要が示唆され、その事例としてボンベイの教科書編纂事業が挙げられたのである^{xxv}。ジャーヴィスは1839年に一時帰国するが、1842年3月24日、再びボンベイへと戻り、1843年よりボンベイ教育委員会委員として在地学校の設立を推進していく。そして1847年には教育委員会の委員長であったアースキン・ペリー(Erskine Perry)との間に教授言語を英語とするか在地語とするかについての路線を巡る論争を引き起こすことになる。論争についての歴史的資料は行政議事録の他、幾つかの文書が教育委員会報告書に採録されている。この論争については別稿にて明らかにすることとしたい^{xxvi}。

ド・モルガン数学書の翻訳と数学教育

ジャーヴィスの手による最後のマラーティー語教科書となったのがド・モルガン^{xxvii}の数学書である。本書については、在地語教育論争の最中に出された1848年5月15日付のジャーヴィスによる提案書が残っている^{xxviii}。ジャーヴィスは、「現地住民はその目的に望ましいような自らの文学を持たず、また翻訳をもってその場を補うことも不可能である」という見解に対して反駁し、あくまで政府には「一般的知識を普及し、有益で合理的な[下線部ママ]教育をするよう計算された作品を十分な数供給するという義務」があり、「職員の監督の下、あるいは良い者に特典を提供することで翻訳を供給する」ことを改めて主張した。この原則に沿い、2年の準備を経て提出されたのが“De Morgan’s Elements of Arithmetic”と“De Morgan’s Elements of Algebra”の2点である。

ジャーヴィス自らの提案書によれば、本書は現地社会から好意的な評価を得たとされている。プーナ・カレッジ学監であったキャンディ(Thomas Candy)はジャーヴィスの翻訳を「英語の構造により接近するが故にしばしば不明瞭な部分がある」が、「一般的な印象として訳出は正確である」とし、原書についても「算術に興味を持つ在地の学者が重視」する

ことは疑いなく、この種の本に対し読者が感じる問題は「知的な学生にとって次第に減ってきている」とした。またプーナ・カレッジ学長モーレーシュヴァル・シャーストリー (Moreśvara Śāstrī) とシャンカル・ゾーシー (Śankara Jośī) は、原書に不案内として翻訳への修正は行わないなど、どの程度まで本書が検討されたかについては疑問が残るのだが、ジャーヴィスの一連の作品が「数学的主題に関して新しく広範な考えを喚起」するもので、「その科学についての事前の知識がなくとも賞賛」しうるものと称えている。

同時に本書で強調されたのは、ド・モルガンによって示された「実践と共に算数の諸原理を導入する」^{xxix} という方法である。ジェイコブ (S. Jacob [William Stephen Jacob?]) は算数・数学の新旧の教授法、特に規則の学習を重視する教育と暗記を重視する教育との相違点への問い合わせに一般論として次のように回答している。

「多くの規則を暗記するだけの者はその規則が拡大される限りにおいては優れた計算者であろうが、彼には数学者の称号を与えることは出来ない。なぜならば規則によらない事例が提示された場合には、彼は途方に暮れるであろう。」

注入教育への批判はインド在来の教育に対して直接向けられたものではなかったが^{xxx}、ド・モルガンの数学書を導入することで、暗記ではなく理解を中心とする数学教育をしようという議論は、ジャーヴィスの提案書の中で幾度も繰り返されている。

おわりに—在地語教育論者としてのジャーヴィス—

政府によって『ド・モルガンの算数の基礎 डमागन याचा अंकग णताचा मूळपी ठका』2,000部が官立学校へ配布されることが決まった後、1851年ジャーヴィスは帰欧し、同年10月24日、ブローニュー・シュル・メールに没する。ここに至るまで、彼の在地語を通じてヨーロッパ諸学を翻訳するという一貫した立場が変わることはなかった。現地社会には伝統的な学問用語としてのサンスクリット語が存在したが、ジャーヴィスが選択したのは、全ての人々が理解する言語としてのマラーティー語やグジャラーティー語といった「在地語」の可能性であった。記述は可能な限り在地語で行われ、もし「文学の開発や拡大に向けられていない」と見なされた在地諸語において適当な語彙が得られない場合には、先ずサンスクリット語から、そしてそれも困難な場合に英語からの借用が行われることで述語が整備された。これらは当時の在地社会が置かれた混淆的な言語状況の中で、在地諸語による自然科学の用語法の指針の一つとなり、その実践は石版・活版印刷を通じて作成されたマラーティー語教科書によって、管区内の官立在地語学校へと普及された。

一方でジャーヴィスの啓蒙主義的立場もまた揺るぎないものであった。ド・モルガンの数学書は、暗記ではない理性に基づく教育の象徴となっている。前述の提案書の中で示されているのは、「在地語媒体の完全な知識による、シンプルだが正確な思考と推論の体系で訓練されることで、現地住民の若者は英語学習の利点に入る準備を整え、更なる知識の進歩のための道具となる」という考えであり、「民衆の教育を効果的に行うために同胞にそれを伝える代理人」を育成する必要であった。在地語は英語とそれによって表象される文化へと昇る階段の下位に位置づけられているのである。

ジャーヴィスは在地語教育論争において在地語による教育を支持する論者の中心的な人物である。しかしながら在地語教育論争を真に理解するためには、アングリシスト・オリエンタリスト論争で行われたようなサンスクリット語か英語かという本質主義的な二項対立とは異なった議論が必要となろう。伝統学問からの影響と西洋科学の卓越の下で開発された在地諸語の翻訳文化が揺籃期のマラーティー語論にどのような影響を与えたのか、そしてその後の現地住民自らによって如何なる形で再び領有されたのか、この点を踏まえつつ今後議論を深めていくこととしたい。

(5) 調査地・文書館建物などの写真

国際会議出席者集合写真：撮影日 2007年12月20日、撮影地、インド・マハーラーシュトラ州プネー（ホテル・スワループ）、写真提供、プラシャント・パルデシ



- i “George Ritso Jervis” in *Minute of Proceedings of the Institution of Civil Engineers; with Abstracts of the Discussions. vol. XI. Session 1851-52*, edited by Charles Manby. London, 1852. pp.106-109. Phillimore. R.H. Historical records of the Survey of India. Dehradun, 1950. p.409. がある。なお旧インド省文書の士官学校記録 L/MIL/9/117 ff.390-91-Cadet 1807 については当該番号が所在不明となっている。
- ii Mumbai State Archives, *General Department Proceedings* (hereafter *MSA GD*) vol.44 (48) of 1821-23, ff.63-76. その後、この協会は 1827 年ネイティブ教育協会(Native Education Society)と名を変え、更に 1840 年に教育委員会(Board of Education)へ改組され、ボンベイ管区内での教育行政の一端を担うこととなる。
- iii ‘Report of the Special Committee appointed to examine the system of education prevailing among the natives and to suggest the improvements necessary to be applied to it’, in *First Report of the Bombay Native School Book and School Society’s Proceedings 1823-24. With An Appendix, The Accounts of the Institution &ca Read on Wednesday, 8th Sept. 1824*. Bombay, 1824. pp 15 -36.
- iv ‘List of Elementary tracts and Books considered requisite for Education’ *ibid.*, 71-74.
- v *The Third Report of the Proceedings of Bombay Native Education Society: 1825-26. With An Appendix, the Accounts of the Institution &c. ,&c. Read at a General Meeting held on Saturday, the 20th January, 1827*. Bombay: Printed for the Society, 1827. p.10.
- vi “Memoir, dated February 7, 1827, compiled from the Records of the India Governments at the East-India House” and “A Supplement to the foregoing Memoir, dated February 23, 1832” , in *Appendix to the Report from the Select Committee of the House of Commons on the Affairs of the East-India Company, 16th August 1832, and Minute of Evidence*. London: Printed by Order of the Honorable Court of Directors. 1833. pp. 245 and 309-311. see also “Analysis of Fisher’s Memoir” in H. Sharp (comp.), *Selections from Educational Records Part I 1781=1839*. Calcutta: Superintendent Government Printing. 1920. pp.197-201.
- vii 林隆夫「パースカラ二世の数学一序説」矢野道雄編『インド天文学・数学集』朝日出版社, 1980. 筆者の目下の関心は、植民地における在地諸語にあるので、南アジアにおける数学論そのものについてはこれ以上立ち入ることは出来ない。この問題についてはいわゆる精密科学の立場から優れた研究の蓄積がある。例えば Pingree, D. *Jyotihsastra: Astral and Mathematical literature*. Wiesbaden: Harrassowitz, 1981. が代表的である。また我が国では前述の矢野、林による一連の研究がこの分野を切り開いている。
- viii “Sketch of the General Plan proposed to be published in the Native Language”, *MSA GD vol.10 of 1821*. ff.1-17.
- ix Wilkinson, Lancelot. “On the Use of Siddhantas in the Work of Native Education” in *Journal of the Asiatic Society of Bengal* , 3, 1834. pp.504-519. ウィルキンソンのプロジェクトについては Young, Richard F. ‘Receding from Antiquity: Indian Responses to Science and Christianity on the Margins of Empire, 1834-1844’, 『国際学研究 (明治学院大学)』 16. 1997. pp.241-274.がある。
- x Minkowsiki, C.Z. “The Pandit as Public Intellectual: The Controversy over *virodha* or Inconsistency in the Astronomical Sciences”. in A. Michaels (ed.) *The Pandit. Traditional Scholarship in India*, Delhi: Manohar, 2001. pp.79-103.
- xii Wilkinson, op.cit, p. 514. シカゴ大学によりウェブ上で公開されているモールズワースのマラーティー語辞典第 2 版によれば、tangent には संपातरेखा (p. 819) [sampātārēkhā] or रेखा f S (संपात Descending, falling, alighting, रेखा Line.) A tangent. स्पशरिषा (p. 868) [sparsārēṣā] f S A tangential line, a tangent. の語が充てられている。
<http://dsal.uchicago.edu/dictionaries/molesworth/> ウィルキンソンはジャーヴィスの事業そのものには賛同していたと思われる。後述するジャーヴィスのド・モルガン数学書の翻訳への提案書に 1833 年 12 月 14 日付の書簡が引用されている。
- xiii Pingee, S.M. *Yuropiyanāṭhka Marāṭhīcā abhyaśa va seva*, Mumbaī : Marāṭhī Saṁśodhanamaṇḍala.1960. pp.119-138. なおピンゲーは Grant, A. *Catalogue of Native Publications in the Bombay Presidency up to 31st December 1864. Prepared under Orders of Government (Second Edition)*, Bombay: Education Society’s Press. 1867.に記載されている以下の二点に関しては入手できなかったとしている。Pingee, op.cit, pp. 134-135.
- Kshetraphalghanphal* [Mensuration of planes and solids], Bombay: Native Education Society, 1838. 8vo. 56p.
- Trikonmiti Lāgartam sahit* [Plane trigonometry (Hutton’s)]. Rs.0.8.0.
- なお Grant op.cit.によれば、ジャーヴィスのマラーティー語作品についてはその後少なくとも下記の版を確認することが出来る。
- Ankaganit*, Bombay: American Mission, 1850. 8vo. 280p. Rs.2.2.0.
- Bhāganit*, Bombay: American Mission, 1851. 8vo. 400p. Rs.2.12.0.
- Adikaran Bhūmiti*, Bombay: Ganpat Krishnāji, 1855. 4to. 172p. Rs.1.4.0.
- Ankaganit*, Part II, Bombay: Ganpat Krishnāji, 1855. 4to. 180p.
- Pūrnānka*, Poona: Nāro A’pāji Godbole, 1862. 4to. 80p. Rs.0.6.0.
- Apūrnānka*, Poona: A’pāji Bāpūji Pādshāpurkar, 1863. 8vo. 100p. Rs.0.10.0.
- Apūrnānka*, Poona: Vīthal Sakhārām Agnihotrī, 1863. Demy 4to. 114p. Rs.0.7.0.
- Apūrnānka*, Poona:A’pāji Bāpūji Pādshāpurkar, 1863. Demy 4to. 100p. Rs.0.7.0.
- Pūrnānka*, Poona:Buddhiprakāś, 1863. 4to. 80p. Rs.0.6.0.
- Pūrnānka*, Poona:Vīthal Sakhārām Agnihotrī, 1863. 4to. 88p. Rs.0.4.0.
- xiv ग्रंथाची भाषांतर किंवा नवीन ग्रंथ करणारास ब सा वर्षयीच प्रसिद्धिपत्र, pp.5-6 quoted in Pingee, op.cit. , p.131. ボンベイ教科書・学校協会の翻訳戦略についてもボンベイ教科書・学校協会の第一回年次報告で、可能な限りマラーティー語・グジャラーティー語術語の利用、知識を誇示するためだけの外来語の回避、マラーティー語・グジャラーティー語で術語が当てはまらない際に同族言語であるサンスクリット語からの支援が挙げられている。 *First Report of the Bombay Native School Book and School Society* . op.cit. p.21.
- xv ग णतमाग, p.[ii].
- xvi Kulkarnī K.B. ‘Pāthyapustakāmcī bhāṣāntare’ in P.R.S.Yog (ed.) *Marāṭhī vānmayācā itihāsa*, Pune: Mahārāṣṭra sāhitya pariśada , 1965. pp.136-137.
- xvii ここでは śikṣāmālā は算術、幾何学、代数学についての総合的名称として用いられているが、通常は獲得された知識、教育といった意味を持つ śikṣā に花環から転じて一連の論説を示すのに用いられる mālā が付された語であり、それ自体に上記の学問分野のみが特定されて含まれるものではない。
- xviii 林. 前掲書, 165.
- xix ピンゲーは本書に吉祥を示す Śri が付されている点や代数学における未知数とその係数を示す yāvattāvāt といった表現を以て『リーラーヴァティー』など伝統的数学からの影響を見ている。Pingee, op.cit., pp.129-130. 但し『リーラーヴァティー』はコールブルックにより 1817 年に英訳される *Colebrooke, Henry Thomas, 1817. Algebra with Arithmetic and*

Mensuration from the Sanskrit of Brahmagupta and Bascara, London. [Reprinted as *Classics of Indian mathematics*, Delhi Sharada Pub. House, 2005.]など、当時の植民地官僚に知られていたのは確かだが、ジャーヴィスの翻訳活動に於いて具体的にどのような形で利用されたのかについては現在の所、判然としていない。

^{xx} *Library of Useful Knowledge; Natural Philosophy, I*. London: Baldwin and Cradock Paternoster-Row, 1829, pp. [1]-48. 但し目次では“Preliminary Treatise: Objects, Advantages, and Pleasures of Science”,本文中では“Objects, Advantages, and Pleasures of Science”など幾つかタイトルの変遷がある。スミスによれば原書は1827年3月に発表され、一部6ペンスの価格で1833年12月までには42,000部が頒布されたとされる。その記述に不正確さを残しつつも、ロンドンの有益知識普及協会は安価な書籍を提供することで、一般読者への科学的な知識を普及を試みた。ペニーマガジンにおいては20万部発行するまでに至ったが、寄付者、購読者の減少により1848年にはほぼその活動を停止した。Smith, H. *The Society for the Diffusion of Useful Knowledge 1826-1846, A Social and Bibliographical Evaluation*, (Dalhousie University Libraries and Dalhousie University School of Library Service Occasional Paper, No.8) London: Vine Press, 1974. p. 29.

^{xxi} 原書の構成は以下の通りである。“Introduction”, “I. Mathematical Science”, “II. Difference between Mathematical and Physical Truths”, “III. Natural or Experimental Science”. “IV. Application of Natural Science to the Animal and Vegetable World”, “V. Advantages and Pleasures of Science”.

^{xxii} “Extract from Proceedings of the Committee of the Native Education Society” dated 13th March 1830, *MSA G.D. vol.6 (203) of 1830*. ff. 309.

^{xxiii} The Memorial of Captain George Ritso Jervis of the Bombay Engineers. To the Honorable the Chairman and Court of Directors of the Honorable United Company of Merchants of England, trading to the East Indies. *Oriental and India Office Collection, British Library* (hereafter, *OIOC Mss. Eur F88/82*).

^{xxiv} Bohman-Beheram, B.K. *Educational controversies in India: the cultural conquest of India under British Imperialism*. Bombay: D.B. Taraporevala, 1943. p.526.

^{xxv} “Minute by the Right Honorable the Governor General and Note by J.R. Colvin, Esq. on Native Education” in *Report of the General Committee of Public Instruction of the Presidency of Fort William in Bengal for the year 1839-40*, Calcutta: Orphan Press, 1841. i-civ. 覚書以後の北インドでの翻訳活動についてはドッドソンがバナーラスのカレッジで行われた科学所の翻訳に関する戦略を取り上げている。Dodson, M. “Translating Science, Translating Empire: The Power of Language in Colonial North India” in *Comparative Studies in Society and History*, 2005. pp. 809-835. 但しドッドソンは1830年代後期の教育行政官にとって、初期インド諸語による教科書作成の試みは「首尾一貫した翻訳がなされず、主として判読不能、あるいは『ネイティブ』の情趣を十分に纏っていない」と認められていたとし、その事例としてジャーヴィスによるマラーティー語数学書を上げている (p.820)が、この評価については再度慎重に検討する必要があるだろう。

^{xxvi} その他に在地語教育論争に関する資料集、研究書としては Richey, J.A. *Selections from Educational Records, Part II 1840-1859*, Calcutta: Superintendent Government Printing, 1922. pp.1-31., Bohman-Behram, *op.cit.* pp. 558-605 などがある。

^{xxvii} ド・モルガン自体は父親が東インド会社武官であった関係でインドに生まれ、生後まもなくイングランドへと帰国するもののインドとインド数学に対しては関心を持ち続けた。北インドでのド・モルガンの受容に関しては、ラエナーとハビーブがデリーカレッジのラムチャンドラ(Ramchandra: 1821-1880)を取り上げている。Raina, D. and Habib, I. *Domesticating Modern Science: A Social History of Science and Culture in Colonial India*. New Delhi: Tulika Books, 2004. pp.24-59.

^{xxviii} “Letter from the Chief Engineer” dated 15th May 1848., *OIOC P/350/22 no.4186*.

^{xxix} De Morgan, A. *The Elements of Arithmetics* (Fourth Edition), London: Taylor and Walton, 1840. pp. vi-vii.

^{xxx} インド数学における暗記の重視とその背理としての理解の軽視という言説があるが、これがどのような形で成立したのかについては検討の余地があるだろう。例えば伝統数学における「証明」の役割については林前掲書 p.186, 194 が指摘している。